

国立研究開発法人 国立国際医療研究センターの薬剤師レジデント制度とその現況 (7)

薬剤師レジデントの研修で得た経験と修了後の現状

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター病院 薬剤部

長島 浩二 (レジデント5期生)

1. はじめに

国立国際医療研究センター病院(以下、当院)は、平成22年4月に国立高度専門医療センターが独立行政法人へ移行することを契機に、薬剤師レジデント制度を導入した。

私は平成26年4月より第5期生として薬剤師レジデントの研修を行った。平成27年度の6期生からは、これまで2名だったレジデント採用枠が6名に拡大され、平成29年度より8期生を迎える。当院のレジデント研修カリキュラムは、感染症領域を中心に毎年より良い内容へと更新されている。本稿では、私がレジデント研修によって得た経験を踏まえて、特にHIV感染症領域に関して紹介したい。

2. 薬剤師レジデントに採用されるまで

大学6年次の就職活動では、将来何がやりたいかということに対してずっと悩んでいた。病院で働きたいという単に漠然とした志望はありつつも、企業や薬局などの説明会にも多数参加した。そのような中でなかなか就職先が見つからずいた時に、大学の就職サポートセンターから当院の薬剤師レジデント募集の話聞いた。当時は薬剤師レジデント制度が今よりも周知されていなかったため、単に給料が安くて大変というイメージがあり、まさか自分がレジデントとして就職するとは思ってもいかなかったのが正直なところである。一度見学に行ってみてはというサポートセンターからの話もあり、当院の説明会に参加した。そこで日本のレジデント制度と海外のレジデント制度の違いについて、また、当院の特徴である様々な感染症への取り組みについての話を聞き、薬剤師としての基本的な知識からより専門的な知識まで

学ぶことができると肌で感じた。特にHIV感染症に関してはこの数十年で新薬が次々と開発されており、治療薬の進歩により今では普通の人と変わらない生活ができるまでになっている。私のHIV感染症のイメージは、数年でエイズを発症して死亡する致命的な疾患であったため、日々治療が進歩している領域であることを知り、非常に興味を持ったのを今でもよく覚えている。その後、すぐに大学の教授に推薦状を書いていただき、無事に内定をいただいたのがつい最近のように感じる。

3. 薬剤師レジデントとしての研修内容

① HIV感染症領域における研修

先の連載者が述べているように当院の特徴として、エイズ治療・研究開発センター(以下、ACC)、国際感染症センター(以下、DCC)、臨床研究センター、国際医療協力局、研究所などを有していることが挙げられる。このような特徴から、当院の薬剤師レジデントカリキュラムは、総合病院としての特徴を活かしたGeneralistとしての一般の薬剤業務や病棟業務等の経験を十分に行うことに加えて、Specialistとして感染症に強い薬剤師を育成するため、ACC、DCCの2つの感染症に特化した診療部門における研修を強化した内容となっている。

② 1年次におけるレジデント研修

1年次に私がHIV感染症領域を学ぶうえで最初に苦労したのは薬剤名を覚えることだった。HIV感染症の治療は、抗HIV薬3剤以上を併用した強力な多剤併用療法(Antiretroviral therapy:以下、ART)が行われる。ガイドラインや各種テキストの薬剤名は、製品名・一般名・略号など様々な薬剤名で表記されている(表1)。例えば、イン

表1 本邦で承認されている薬剤 (2017. 4月現在)

分類	薬剤名: 略語で記載
NRTI	AZT(ZDV)、3TC、ABC、AZT/3TC、ABC/3TC、d4T、ddI-EC、TDF、FTC、FTC/TDF、FTC/TAF
NNRTI	NVP、EFV、ETR、RPV
PI	IDV、SQV、RTV、NFV、FPV、LPV/RTV、ATV、DRV、DRV/COBI
INSTI	RAL、DTG、EVG
CCR5I	MVC
STR	GEN、STB、CMP、TRI

テグラゼ阻害薬の「アイセントレス[®] (製品名)」は、一般名が「ラルテグラビル」, 略号が「RAL」となっている。カンファレンスや研修会ではこれら製品名・一般名・略号が混合して使われているため、慣れるまではとても苦勞した。毎日カルテを見ながら頭の中で整理して何度も覚え直したがなかなか覚えられず、よく上司からプレッシャーをかけられた。今思えば最初にしっかりと薬剤名を頭に叩き込んだことで、その後の研修では薬剤と疾患や病態をスムーズに関連付けることができた。

1年次には、ACCで実施される薬剤師研修コースへの参加が必須となっている。他には、HIV/AIDSブロック拠点病院が実施する研修会へも参加した。「関東甲信越HIV感染症連携会議(新潟)」や「薬剤師のための抗HIV薬服薬指導研修会(広島)」は、他施設のHIV診療に携わる医師や薬剤師などとネットワーク作りができ有意義であった。特に広島では薬剤師と心理士が合同で講義やグループワークを行うため、単に知識の習得だけでなく、患者との接し方や服薬指導のシミュレーションが大変勉強になった。また、夜の懇親会では他の病院のスタッフと様々な話を交わすことができたことは人生において大きな糧となっている。

ACCでは外来・入院HIV感染症カンファレンスを各々週1回実施している。カンファレンスにはレジデントも参加し、症例検討や最新の情報などを学ぶことができる。また、カンファレンスに参加したレジデントは、レジデントOB/OG、HIV感染症専門薬剤師や認定薬剤師が参加して毎

週行われるレジデントミーティングで症例を報告する。ミーティングではカンファレンスで問題になった症例や話題になった内容などについて薬学的観点で議論を行っている。知識や経験が浅く、分からないことも多いため、様々な症例や話題についてカルテや文献を検索して夜遅くなることもある。時には調べ方

が不十分と指摘されることもあり、毎回の準備は大変な作業であるが、繰り返し行うことで、疾患の理解やプレゼンテーション能力が鍛えられたと思っている。元々、プレゼンは苦手であったが、場数を踏むことでその後の自信につながっているのではないかと思う。

③ 2年次におけるレジデント研修

2年次は、主に病棟薬剤師業務を通して病棟に常駐し、カンファレンスに参加するなどチーム医療について学ぶことができる薬剤師レジデントカリキュラムになっている。1年次では単純にカンファレンスに参加するのみであったが、2年次では病棟での業務を行いながらカンファレンスに参加することで、1年次とはまた違った見方で学ぶことができた。HIV感染症や日和見疾患の治療方針など基本的事項を学ぶことが主体であった1年次に対して、2年次では病態変化や副作用発生状況など毎日の患者の状態を把握したうえでの医薬品情報提供や患者指導が主体となる。病棟常駐することで個々の患者背景、併用薬・サプリメントといった情報も把握しているため、医師や看護師への情報提供も具体的に示せるようになり、チーム医療の重要性について学ぶことができた。

HIV感染症領域では、ARTが複数の抗HIV薬を組み合わせで行うこと、代謝においてチトクロームP450 (CYP) の関与する薬剤が多いこと、食事の影響を受ける薬剤があること、日和見疾患治療薬だけでなく糖尿病や冠動脈疾患などの生活習慣病治療薬との併用が多いことなどが挙げられる。抗HIV薬や併用薬の薬物相互作用の確認は重

要であり、例えば、抗HIV薬の血中濃度が低下した場合には、耐性ウイルスの出現により治療が失敗する恐れがあり、一方で抗HIV薬の血中濃度が上昇した場合には副作用が出現する可能性がある。ARTは一生服用し続けなければならないため、治療失敗により服用しづらいARTレジメンへの変更は患者の服薬アドヒアランスの低下にもつながる。そのため、薬剤師による薬物相互作用の確認は必須と言える。

薬物相互作用の確認は添付文書が主であるが、添付文書には薬物血中濃度などが記載されていない、データが古い、具体的な方策が書いていないなど苦渋することが多々ある。そこで図1に示すようなツールを使用し実際に薬物相互作用を確認している。海外の薬物相互作用データベースはアップデートが早くとても有用なツールであるが、外国人のデータであるため人種差を考慮する場合もある。また、日本国内のみの承認薬は当然ながらデータベースにはないため、その際にはインタビューフォームから薬物代謝酵素を確認して相互作用を予測するなど総合的な判断が必要となる。薬物相互作用の確認は様々な情報から予測するなど難しい面もあるが、医師とディスカッションしながら投与量の調節や代替薬を提案するなどやりがいがある。このように薬学的な知識を活用し情報提供するとともに、チーム医療の中で薬剤師が活躍できることを実感することができた。

④レジデント研修を通して

レジデントの研修は2年という短い期間であったが、HIV感染症領域に関しては最新の治療や情報を学ぶことができた。特にHIV感染症の治療は日進月歩であり、毎年のように新薬が登場してガイドラインが更新されるなど、常に最新の動向を収集する必要がある。また情報収集の中で、エビデンスのある正確な情報を取捨選択する大変さ

- 添付文書(PMDA <http://www.pmda.go.jp/>)
- HIV/HCV Medication Guide <http://www.hivmedicationguide.com/>
- The University of Liverpool <http://www.hiv-druginteractions.org/>
- HIVInSite (University of California San Francisco) <http://hivinsite.ucsf.edu/InSite>
- 抗HIV薬の血中濃度に関する臨床研究 <http://www.psaj.com/index.htm>
- 中四国エイズセンター <http://www.aids-chushi.or.jp/index.html>
- DHHSガイドライン(AIDSinfo) <http://aidsinfo.nih.gov/guidelines/>



図1 薬物相互作用

を実感した。当院はACCを有しており最先端の医療情報に触れることができ、とても恵まれた環境であると改めて感じる。決して容易ではなかったが、レジデントの研修を通して、HIV感染症の基礎から応用までを学ぶことができ非常に充実した研修生活を送ることができた。

4. 現在の業務内容

薬剤師レジデントを修了後は常勤職員として採用となり、薬剤師として4年目を迎える。現在は病棟担当薬剤師に加え、ACC外来でも服薬指導に携わっている。

ACC外来での服薬指導では、ART導入に向けてのアセスメント、服薬開始時説明、服用開始後の副作用確認、薬物相互作用や患者からのお薬相談など様々な形で指導を行っている。抗HIV療法の目標はARTによって、血中ウイルス量をできる限り長期に検出限界以下に抑え続けることであり、この目標は患者が規則正しい服薬を続けることによって初めて達成することができる。目標達成には服薬アドヒアランスが最も重要となる。患者によって抱えている問題や環境などの背景が異なるため、患者が積極的に治療方針の決定に参加し、治療を継続できるように支援していく。そのためには、患者からの情報の引き出し方、ライフスタイルに合った服薬設定、副作用の発現状況、中断してしまった患者の対応など難しいことも多いが、他の医療スタッフとコミュニケーションを

とってチーム医療を実施することにやりがいを感じている。患者と信頼関係の構築においてもコミュニケーションスキルはとても重要となる。まだ、外来に携わって間もなく、大変な面もあるが、貴重な経験を積むことができている。今後、さらに多くのことを学び、HIV診療に携わっていけるように日々研鑽に励みたい。

5. 薬剤師レジデント卒業生としての今後の目標

薬剤師レジデント研修で得た経験を活かして、

将来はHIV感染症薬物療法認定・専門薬剤師も目指していきたい。

また、私が学んできたことを後輩のレジデントに伝えていくこともレジデント修了者としての責務と考える。教わる立場から教える立場となっていくため、私自身もさらにステップアップし、より良いレジデント制度の構築に寄与していきたい。